

## 聴覚障害児への指導・支援

国立特別支援教育総合研究所 山本 晃

### 1 はじめに

明治11年(1878年)に京都盲啞院で、聞こえにくい子どもたちへの教育が開始されてから、我が国の聴覚障害教育は約140年が経ちます。その間、学校現場の先生方、研究者他、聞こえにくい子ども達に関わる方々の不断の努力により、聞こえにくい子ども達への教育は進展を遂げてきました。昭和35年に、岡山県の岡山市立内山下小学校(現在の岡山市立岡山中央小学校)に難聴特殊学級が設置され、その後昭和40年代には、全国各地の小・中学校に難聴特殊学級の設置が広まりました。そして、平成5年には、義務教育段階における通級による指導が、平成30年には高等学校における通級による指導が実施されました。平成30年時点で、全国の難聴特別支援学級設置校は、小学校1,242校、中学校470校、難聴通級指導教室設置校は小学校1,750校、中学校446校にのぼります。

ここでは、自分の経験をもとに、難聴特別支援学級や難聴通級指導教室担当の先生方に対して伝えたいことを、述べさせていただきます。

### 2 難聴特別支援学級や難聴通級指導教室担当者として大切にすべき専門性

ここでは、全難言協で整理した専門性の3つの側面(全国公立学校難聴・言語障害教育研究協議会HP内の全難言協の概要の中に記載)に沿って、私の考えを述べていきたいと思います。

#### (1) 子どもとかかわる「かかわり手」としての力について

まず、聴覚障害の専門知識を有していること以前に、担当している子どもについてどれくらい見ているか、理解しているかが、大切なことであると思います。例えば昼休み、先生は宿題のチェックをしたり、様々な仕事に追われていたりすると思います。一緒に校庭で遊ぶことができなくても、昼休み、担当している子どもたちは誰と遊んでいるのか、どんな様子か、そういったことを気にかけて、気付いたことがあれば、教室に来た時に、「どうしたの?」と声をかけられるような姿勢を維持することが大切です。

また、子ども達と会話をするときは、その中にさりげなく言語指導を意識したやりとりを行う必要があります。このことは、聴覚障害教育において、従前より大切にされてきた専門性の一つです。聞こえにくいということにより、言語面の課題が生じる傾向がある子ども達に対して、適切な日本語を意識しながら会話をしたり、例えば、子どもの発言に対して、「どうしてそう思うの?」「どうしてわかったの?」等と返したりして、ものごとの根拠を考えさせたり、正しい日本語で話をさせたりするやりとりを意識することが大切です。

#### (2) 保護者や在籍校の先生方、関連機関や仲間とつながる力について

言うまでもなく、自分一人でなんとかしようとするのではなく、周囲の先生やスクールカウンセラー、養護教諭等の先生方に尋ねることができる力も専門性の一つです。保護者とよく話し、家庭での子どもの状況や、保護者の教育に対する考え方をすることは、子どもへの日々の指導に繋がります。子どもに

関わる人と話すことによって、自分が知らなかった子どもの実態に気付かされるものです。さらに、全難言協の先生方や、同じ県内の難聴特別支援学級や難聴通級指導教室の先生と繋がることによって、子どもへの指導のヒントが生まれるかもしれません。

### (3) 難聴・言語障害やその教育に関する専門的な知識や技能について

専門的な知識や技能には様々なものがありますが、ここでは教科指導や学校生活の中での言語指導に関わる内容に絞り、いくつか書かせていただきます。

言語指導について触れる前に、子どもに尋ねる（発問する）際は、子どもの実態を把握した上で、何を考えさせたいのかを明確にする必要があります。さらには、子どもがこの人（親や担任教師）と関わりたい、この人の言うことを聞いてみたいという関係性が形成されていることも、言葉を豊かにするためには欠かせないことです。

#### ①国語の読解の指導

よくあるのが、教科書本文中に難しい言葉がたくさんあり、それらの言葉の意味を教えるだけで多くの時間がかかってしまう、そんな話を聞きます。また、分かっているようだけれども、内容について聞いてみると、答えられない場合が多くある、そんな話もよく聞きます。

例えば、小学5年生の国語の題材である「注文の多い料理店」（著 宮沢賢治）を学習する場合、単元に入ってから難語句「損害」「西洋造り」「見くびる」「なんぎする」等を一つ一つ学習していくのでは長い時間もかかり、「この言葉の意味は何？」というようなやりとりではなかなか言葉は覚えにくいと思います。言葉は生活の中で、または興味を持った話の中で、心が動いたときに学ぶことが、最も理解しやすいと言われます。従って、単元に入る前の、例えば一ヶ月前あたりには、子ども達が分かりにくいであろう新出語彙や難語句を先生が精選し、自分の担当している子ども達の保護者に、生活の中で使ってもらうことを依頼したり、先生自身が学校生活の中で使ったりすることが必要だと思います。例えば、学校の近くに西洋造りの家があるのであれば、一緒にその近くを歩いたときに「あの家を見てどう思う？」「(子どもから出てこなければ) なんだか外国(ヨーロッパ)にあるような家の造りだね。ああいうのを西洋造りって言うよ。」等と普段の会話の中でしておく、国語の時間の読解の指導に役立つと思います。

また、聞こえにくい子どもの場合、教材の読み取りにおいて、内容理解が不十分な場合もあります。それは、例えば言葉にはいくつかの意味があるのを知らず、どの場面でも、自分が知っている一つの意味で考えるからです。一つ具体例を挙げると、子ども達は家の人とファーストフードやレストランへ行って、「食事を注文する」という意味は知っていても、人に依頼したりするときに使う「注文をつける」という意味を知らない場合があります。この後者の方の意味を理解していないと、この「注文の多い料理店」の理解は難しくなります。この物語の「注文」は、「食事を注文する」と「人に依頼する」の両方の意味をかけているからです。

#### ②身の回りのものを題材にした指導

聞こえにくい子ども達に言葉を教えるには、教科指導以外の時間、学校生活や日常生活の中で、言葉を教えていく必要があります。ここでは、2つの具体例を紹介します。

##### ア 説明書きを読みながらマスクをつくる活動

子どもにとって、調理をしたり、制作したりする活動は、子ども達の意欲が喚起される活動の一つ

です。例えば、物を作るのが好きな子どもと、毎日使う「マスク」を手作りする活動を行うとします。その際、まず「どうしてマスクをつくるのか。」「どんなマスクをつくりたいか。」について、考えさせ、正しい日本語で説明させたり、「この説明書きをよく読んで作ると、とっても良いマスクが作れるよ。」という話をしたりして、マスクを作っていく際、「三つ折りにする」「たたんで折り込む」「ゴムの長さを調節する」等の言葉を作業させながら理解させます。さらに、出来上がってから、「アイロンをかけるのはなぜだろう。」という話もし、子どもに考えさせることもできます。

#### イ 毎日の天気予報の話を会話の中に入れる活動

また、小学生段階の生活言語がある程度身に付いた子どもに、毎日目にする天気予報を用いる言語指導の活動も考えられます。天気を表す言葉は、「晴れ」「曇り」「雨」だけではなく、「汗が止まらないような暑さ」「今にも泣き出しそうな空」「バケツをひっくり返したような大雨」等、比喩表現も用い、いろんな言い方ができます。そのことに興味を持たせ、様々な日本語で天気を表現する活動も考えられます。例えば、朝、「今日は雲がだんだん増え、次第に天気が崩れるみたいだよ。」と朝の会で話し、時々休み時間に空模様と一緒に見れば、実際に天気が悪くなる様子がわかり、天気が崩れるというのは、天気が悪くなるという意味なんだということがわかっていくかもしれません。聞こえにくい子どもは「崩れる」というのは、山崩れのような意味だけと理解している場合もあります。天気の話を経々の会話の中に入れることによって、四季に応じた日本語を学ぶ機会になるかもしれません。

### 3 専門性の向上と継承

時折、聴覚障害教育を担当された先生から、「指導に関するマニュアルはありませんか?」と、尋ねられる時があります。例えば、聴覚障害教育の手引-言語に関する指導の充実を目指して- (文部科学省) や国立特別支援教育総合研究所の「学びラボ」のページには聴覚障害教育の講義コンテンツがあります。本大会が行われる予定であった岡山県でも独自の「きこえの教室ハンドブック」(岡山県聴覚・言語・情緒障害教育研究会編) が作成されています。これらの本やコンテンツで学ぶことは専門性の向上の上でも、重要なことです。

しかし、これらと並行し、担当したお子さんに合わせたやり方というものがなくなってきます。

例えば、指導記録を付けて、その記録を見直すことで、子どもの実態把握と自分の指導の適切さを振り返ることができます。子どもの様子や指導の目標、手立て、内容、成果について、記録を付けると、同時に次の授業でやらなければならない目標が明確になってきます。こういう記録をもとに、聞こえにくい子どもにどのように関わっていけばよいか、指導していけばよいかを先輩教員に尋ねたり、ひとり担任だとしても、全難言協、地域の難聴特別支援学級、難聴通級指導教室担当の先生と話したりすることによって、専門性の向上と継承に結び付くかもしれません。決まったケース会議の時間でなくても、子どものことや指導のことを聞けるような環境であればよいと思います。わからないことは調べたり、人に聞いたりする姿勢を大切にしていけば、聞こえにくい子どもに対する専門性の向上に繋がることになると思います。